

一つ目妖怪・キツネ・タヌキ・墓石磨き・化け物屋敷：

昨年、茨城県と栃木県の妖怪についてまとめることになって、いまいちど古河の妖怪について見直してみようと思いました。一つ目玉の団十郎、キツネ、タヌキなど、古河にはさまざまな怪異譚がありますが、調べていると墓石磨きなんてものもある。正体が何者かわからないが、一晩に大量の墓石が磨かれる怪だという。江戸時代の随筆にしばしば登場する墓石磨きは、古河周辺から始まったとされるのだという。墓石が磨かれ、文字に朱を入れるところは新たに朱をさし、金を入れるところにはクチナシをさして黄色に染め、これが一夜にして200基に及ぶのだと。なんて手際の良さ。そんなあやしい話は尽きません。そうかと思つくと、幕末から明治の国学者岡本保孝によれば、古河に化け物屋敷があったと自身の著作に記しています。そこ住むと、「夢に歌を見る」なんていわれていたとい

う。ロマンチックな感じもしますが、それも化け物の力(?)といたところなんでしょう。そこで、今回は、そんな化け物たちが次から次へと登場する話でも。

### 梅屋敷の大貉の話

さて、50年以上も前になりませんが、両親に手を引かれて散歩したその道すがら、金網でかこまれたその向こうをさして、「ここはね、梅屋敷といわれていたんだ」と語りかけられたことを記憶しています。すでにわたくしの覚えには、梅の木はないのですが、そこを屋敷としていた初代古河町長蔭山新七郎によって、旧藩土屋敷や近隣の梅の名木を移植した庭園がありました。その品種は50種以上ののぼり、香り漂う梅の園から、そこは「薫梅園」と命名され、明治40年代には、この庭園を開放して、園遊会が催されていたのだとい



▲明治のころの薫梅園

古河城下には侍屋敷が並ぶ屋敷町の一角に、夜な夜ないろいろな化け物が現れるという屋敷があった。あるとき、武者修行をしている旅の侍が、古河を通りかかる時、この話を聞きつけ、「その化け物を退治しよう」と単身その屋敷に乗り込みました。

夜も更けると、まず、紫の着物を着た少女が庭石をつたってピョンピョンと軽い足取りであらわれ、「お茶をめし召し上げれー」とやってきて一つ目小僧になって現れる。次に庭石をミシリミシリと踏んで、一つ目片足の傘が赤い舌を出して現れては消える。さらに、顔を朱に染めて、大きな白い衣を着た大入道が現れる。そのように入れ替わり立ち替わりあらわれる化け物を、侍は一刀両断し、みごと退治した。翌朝見ると、その正体は、それぞれに化けた一匹のムジナであったという。

### ムジナの特徴とカブキリ小僧

ここに登場する一つ目小僧や大入道の正体、すなわちムジナは、さまざまなものに化けて、人をだますものとされています。ムジナ同様キツネも化かすものですが、

辞書で調べてみるとムジナはアナグマの一種として、両者は区別されるもの。こうした違いは、行動にも表れ、古河周辺では、キツネは人間の前で化かし、ムジナは後ろで化かすものと伝えられている。そんなムジナは、なんにでも化けることができるのであるが、とりわけて「お化け」に化けるのが上手だといわれています。

ところで、全国各地の妖怪を調べてみると、そうしたムジナが化けた化け物のひとつに、カブキリ小僧と呼ばれるものがあることに気づきました。カブキリ小僧は、下総国(茨城・千葉の一部)で、さびしい山道や夜道に現れるとされていて、丈の短い着物におかっぱ頭(カブキリ)で、「水飲め、茶飲め」と水や茶を強要するという。東北地方で福をもたらすとされる座敷わらしに相当する、カブキレワラシやカブキリも、その外見的特徴に共通するものがあるようです。

そういえば、梅屋敷に現れた紫色の着物を着た一つ目小僧も正体がムジナで、加えてわざわざお茶を勧めてきたところをみると、おそらくこれに類したものと見え



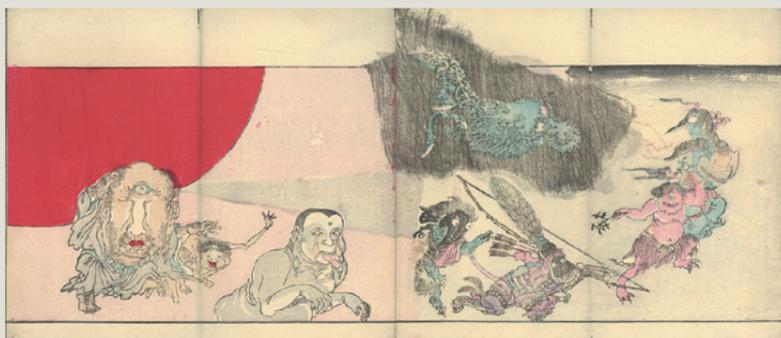
▶古河周辺にあらわれた、ムジナとされるはく製

### 自然と人間のせめぎあいと怪異

その後の梅屋敷は、平穩が訪れ、古河城下の侍屋敷となり、のちに多くの人びとが集う薫梅園となった。日々平安にわたしたちが暮らすことができる場所、それはこうした過去の自然と人間とのせめぎ合いのなかで、さまざまな想像力が働き、それを後世に残すために、妖しげな話が生まれ伝えられてきたのでしょう。近年、消えゆく雑木林から住処を追われ、道路に出てきては自動車に轢かれて

た。東北地方各地に伝わるカブキレワラシは、それがやってくると家が栄えるといひます。我が家にもそんなワラシがやってこないものかとひたすら願うばかりです。できれば一つ目小僧ではない姿で。ん？ そもそもウチには福の神なんぞ来やしないって？

生涯学習課・古河歴史博物館学芸員 立石尚之



▲古河出身の画家河鍋曉斎が描いた妖怪